

## 流浪の民、アフスカ・トルコ人 (Ahıska Türkleri) —トルコ人に忘れられたトルコ人—

吉田 瑠美

私は、約1年半の間、トルコ共和国第三の都市イズミルに滞在し、そこで多くのことを学び、また経験した。トルコ滞在の主な目的は、オスマン帝国経済史研究のための文献収集とトルコ語文献解読能力の獲得であったが、そこで生活をするなかで、研究対象であるオスマン帝国とその後のトルコ共和国の枠組みや「トルコ人とは何か」といった基本的概念をも揺るがされることになった。そのきっかけは、私が通っていた語学学校、エーゲ大学トルコ世界研究所 (Ege Üniversitesi Türk Dünyası Araştırmaları Enstitüsü) のクラスメートとの出会いで、かれらの大半が「トルコ人」であったことである。私のクラスメートは、アゼルバイジャン、カザキスタン、トゥルクメニスタン、キルギス、ロシアから来ており、彼らはみな「トルコ系」であった。さらにかれらの半数以上が後に述べるトルコ共和国のトルコ人と同族のアナドル・トルコ人である「アフスカ・トルコ人

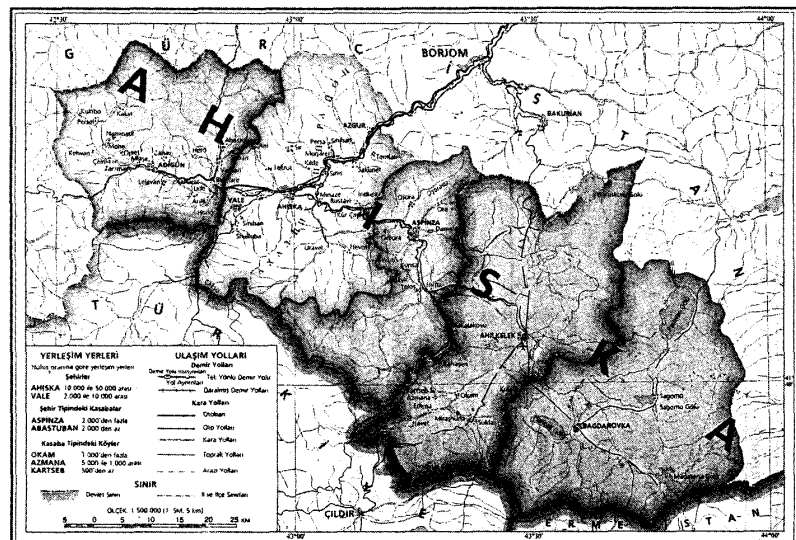
カ・トルコ人の歩んできた悲劇の歴史について概観した後、彼らとの関わりの中で一外国人として私が感じ学んだことを記したい。

### アフスカ・トルコ人 (Ahıska Türkleri) 苦難の歴史

アフスカ (Ahıska) とは今日のグルジア国境内にある、トルコ国境に約15キロメートル隣接した所に位置する以前オスマン帝国領土であった地域のことを指す (図1)。そしてここで「アフスカ・トルコ人」として訳出している「アフスカ・トゥルクレリ (Ahıska Türkleri)」とは、簡単に言うのならば「グルジアのトルコ国境に近い地域に住んでいたが、第二次世界大戦の終わり頃にソ連の他の地域へと追われたトルコ人」<sup>1)</sup>を指す。アフスカの語源は、以前はグルジア語で「新しい城壁」を意味する「ahal-Tsihen」から派生したとされていたが、1578-82年にここを訪れた歴史

図1 (出典 Rasim Bayraktar, 2000, P.118)

人である「アフスカ・トルコ人 (Ahıska Türkleri)」であったのである。私は彼らを通じて、オスマン・トルコ帝国と言われた一方で、多様な民族を包含していたオスマン帝国の有り様と、帝国崩壊後の旧オスマン領に生きるトルコ人の苦悩と複雑さを学んだ。このフィールドノートにおいて、そのように私のトルコ認識に多大な影響を与えた私のクラスメートであるアフス



家グリボルル ムスタファ アリー チェレビ (Gelibolulu Mustafa Ali Çelebi) が、今日のアフスカの地をトルコ語で「Ak-Şekir (白いまち) という意味合いの Akhal- Kelek (Akhal-Kalak) の名前を名付けられた城塞」として書き留めていることが明らかになり、この説が現在有力視されている<sup>2)</sup>。642年にヒズメット・オスマン (Hz.Osman) の時代にイスラム教徒の支配下に入り、1068年にセルジューク朝、1268年にモンゴルに支配された。モンゴルの支配下から逃れた後、彼らの中から立ったデレベイ (Derebey) が統治したが、1578年にオスマン帝国の統治下に編入されて、州の一つとなった<sup>3)</sup>。

彼らの過酷な歴史が始まるのはオスマン帝国がその崩壊過程で、ロシアとの戦いを始めた頃からである。対露戦争時、カルスを占領したロシア軍は、後の1828年にアフスカも制圧し、その後の1829年のエディルネ条約によって、この地はロシアに引き渡されることになった。これによりアフスカ・トルコ人は永遠に国境によりトルコと隔てられたのである。第一次世界大戦時には、トルコ愛国運動を先導したとして150人を超えるアフスカ・トルコ人達がロシア政府によって捕らえられ、この地域のトルコ人の存在を懸念したグルジスタン人、アルメニア人、ロシア人によって、数千のトルコ人が虐殺されたとされている<sup>4)</sup>。しかし帝国に彼らを保護する余力がなく、国際世論も彼らに関心を向けることはなかった。1930年代においても彼らは、宗教、文化、経済、政治的に圧迫を受け、多くのアフスカ・トルコ人がトルコ共和国に移住しようとするが、この大量移住を嫌ったソ連政府は、1937年に彼らを「革命の敵」と宣言し、彼らのリーダーであったオメル ファイキ (Ömer Faik) をトルコのスパイとして投獄している<sup>5)</sup>。第

二次世界大戦では、5万人のアフスカ・トルコ人の若者が戦場に駆り出され、3万人の命が失われたとされている<sup>6)</sup>。しかし彼らの悲劇はそれでは収まらず、さらなる悲劇が待ちかまえていた。

1944年7月31日、ソ連は、アフスカ・トルコ人の流罪を極秘裏に決定したのである。これによりアフスカ・トルコ人の流浪の歴史が始まる。祖父、祖母の話として、アフスカ・トルコ人の友人たちが私に語ったように、アフスカ・トルコ人たちは貨物列車に詰められて、ソ連の各地へと流刑されていった。この過酷な旅により数千人のアフスカ・トルコ人が命を落としたとされている。しかしこのような過酷な旅に生き残り、ウズベキスタンへと流されたアフスカ・トルコ人に、45年後さらなる悲劇が待ちかまえていた。ソ連邦崩壊前の1989年のウズベキスタンにおいて、同じムスリムのトルコ系ウズベキ人から、投石、殴打などの暴行を受けるという事件が起り、これによって、約500人のアフスカ・トルコ人が亡くなったのである<sup>7)</sup>。彼らはようやく手に入れた安定したウズベキスタンの生活を捨て、カザキスタンやアゼルバイジャンへと満足な交通手段もないままに追われることになった。

現在、このように各地に散らされたアフスカ・トルコ人は、12カ国264の地域に約60万人いるとされ、ロシア連邦には28地域に7万人、カザキスタンには14万5千人、アゼルバイジャンには10万6千人、キルギスタンには5万7千人、ウズベキスタンには3万人、ウクライナには1万8千人、トルコ共和国には20万人、その他の国々で3万人が暮らしている<sup>8)</sup>。

**時代と国境がもたらしたトルコ人との溝**

私のクラスメートの大半がこのような悲劇的な歴史を持つアフスカ・トルコ人だったのである。驚くことに1944年にアフスカ・トルコ人が旧ソ連の各地に離散させられた事実は、40年以上にわたって隠し通されてきた。第一次大戦時の虐殺が世論に何の関心も払われなかったことに加え、第二次世界大戦末期の強制移住も隠蔽され、黙殺されてきた。関心を払わなかったのは、何もトルコ世界の外部だけではない。現在のトルコ共和国国内でも、一体どれほどの人がアフスカ・トルコ人の存在を知っているのか、はなはだ疑問である。私は、入学後、かれらが「私はアフスカ・トルコ人です。」と言うたびに、「アフスカ・トルコ人とはどのような人ですか?」と聞くに聞けず、トルコ人の友人達に「アフスカ・トルコ人とはどのような人だ?」と聞いてまわってみた。しかし私の疑問に答えることの出来る友人はおらず、仕方なく注1にあげたトルコ語・トルコ語辞書で調べたという次第であった。悲劇的にも彼らは、「トルコ人にも忘れられたトルコ人」なのである。

このような忘れられた彼らだからこそ、彼らは私に多くのことを話してくれた。クラスメートの一人であるアゼルバイジャンから来たNは、私に彼女と彼女の家族のことを話してくれた。彼女の家族と叔父は、ウズベキスタンに送られた後、比較的裕福な生活を送ることが出来ていたそうである。それがウズベク人の反感を買ったともいえる。叔父は学校の校長をし、父は商売に成功していたそうである。しかしウズベキスタンでの彼らがようやくつかんだ安定した生活にも徐々に影がさしはじめた。その兆しは、叔父の降格から始まったそうである。叔父は、校長から副校長に降格された後、最後は学校の用務員にまで格下げされた。結局、彼らは身の危険を感

じ、ウズベキスタンで築いた全てを捨て、アゼルバイジャンへ逃げるしかなかった。アゼルバイジャンでの生活はウズベキスタンの時よりも厳しいそうである。現在の彼女の姉二人は、トルコ政府の奨学金によってトルコの大学に通っており、姉妹三人がトルコで職を得て、父と母を呼び寄せたいと考えているそうである。

アフスカ・トルコ人である彼らは、トルコ政府の奨学金の受給者で、大学卒業までの学費、寮費と月額約1億2千万TL（日本円で約1万円）の生活費が約束されている。彼らの多くが述べたところによると、特にロシアでは学校入学でさえ賄賂が横行しており、経済的基盤の弱いアフスカ・トルコ人たちは高等教育の機会から遠ざけられているらしい。ロシアから来たFは、声を荒げてこう言った。「ロシア人は我々にトルコ共和国に移ってもらいたいと考えている。彼らは我々に関心を全く払っていないの。」彼女の父親は、建築家としての資格を持ちながらも全く職業の機会を得られず、結局は電話もない村で牛などを飼い、チーズ、牛乳を売り家族を養っているそうである。ロシアに限らず、多くのクラスメートがこのような村から来ていた。彼らの多くが貧しい村の出身であり、自国では満足な高等教育の機会を得ることが出来ない者達であった。

また驚いたのは、彼らはトルコ共和国のトルコ人よりも「トルコ・ムスリム」としての価値観を維持していることである。多くの者達が家族の決めた者と結婚し、結婚も現在のトルコでは見られなくなった伝統的様式で行う。また彼らの多くが敬虔なムスリムであり、ラマダンになると全てのクラスメートが断食をし、授業の合間にモスクに通っていた。カザキスタンから来た女の子Aは、初めてジ-

ンズをはいてきた日、少し興奮した面持ちで「初めてズボンを買った。カザキスタンの家に帰る時は捨てるに帰らないとお父さん達に怒られてしまう。」と言っていた。少し大胆な服を着た彼女達に対して、男の子達はいさめるようなことをよく言っていた。彼らは彼女たちの保護者として男性としての義務を果たしていたのである。男の子達の多くが女性は男性の一步後ろを歩くべきであると言ってはばからなかった。そしてかれらの多くが家庭内でトルコ語を話すことや衛星放送を通じてトルコのテレビ番組を見ることなどでまったく支障なくトルコ語を話すことが出来た。アフスカ・トルコ人達は、第二次世界大戦後散り散りになりながらも、トルコ・ムスリムとしてのアイデンティティーを維持し続け来たのである。彼らの多くは、自らを、19世紀にロシアに分割されてしまい、運悪くトルコ共和国に入ることの出来なかった「トルコ人」と見なしている。彼らは自分たちが生活してきたカザキスタン、ロシア、アゼルバイジャンなどをアイデンティティーの拠り所とせず、それをトルコに求めているのである。私のクラスメートの多くが家族の希望によりトルコに来ていた。彼らの家族達は、息子達がトルコで職を得た後、トルコへの家族全体の移住を考えているのである。

17歳から20歳の間の私のクラスメート自身の将来の夢も、大学卒業後にトルコで職を見付け、両親を呼び寄せることか、もしくはアフスカの地へ帰ることである。一外国人として率直に言うならば、高い失業率とインフレに長年苦しみ続けているトルコには、約60万人といわれるアフスカ・トルコ人を受け入れるだけの経済的精神的余裕はない。それは教諭達の言動の節々からも見て取れた。教諭達は彼らにアナドル・トルコ人としての誇りを

持たせる言動を繰り返したが、決してトルコへの移住を勧めたりはしなかった。いや、それをいさめてさえいた。トルコで修学した後は、自国に帰り、自国で職を得、自国でトルコ人としての地位を高めて欲しいと常々言っていた。また私の友人であるトルコ人たちとアフスカ・トルコ人の見解の相違も見て取れた。自身のアイデンティティーをトルコに求めるアフスカ・トルコ人であるが、トルコ国内のトルコ人たちはアフスカ・トルコ人を「外国人」とみなしているのである。前述したようにある意味頑なまでのトルコ・ムスリムとしての価値観を維持しているアフスカ・トルコ人は、トルコ人からみるとかなり奇妙な存在でもあるのである。私の友人でありエーゲ大学に通うEは、かれらが嫌いだとはっきりと言った。集団で固まり、常識がトルコ人と違うのだと言っていた。

トルコでの夢を語るクラスメートを私はいつも苦しい面持ちで見つめていた。国の都合で国境が引かれ、その後の決して短いとはいえない時の流れの結果、彼らはどこにも入ることが出来ない、どこにも真に受け入れられることのない民族になってしまったのである。全く悲劇的なことではあるが、どんなにそのアイデンティティーの拠り所をトルコに求め、トルコ共和国に移住しても、トルコ国内のトルコ人は、かれらを豊かな国へと移住してきた単なる「外国人」としてみている場合が少なくないのである。それをただの一外国人の私が気づき、まだ十代の彼らが気づいていないことがただ心苦しかった。

### 終わりに

私は彼らと出会い、日本では決して知ることが出来なかった彼らの存在と歴史を知ることが出来た。彼らが一番に私に望んだこと

は、アフスカ・トルコ人の存在を日本に知らせることであった。ここに述べたかれらの歴史の概略と人口数は、アフスカ・トルコ人によって書かれた著作<sup>9)</sup>のために客観性を欠いている可能性がある。しかし彼らがこうむった抑圧と虐殺は消すことの出来ない事実であり、その生き証人がまさに私のクラスメートたちなのである。日本人としての私は、歴史に存在そのものを黙殺された者としての彼らの痛みを真に理解することが出来ないであろう。まだ17歳から20歳の彼らが、その痛みを耐え、戦っている姿は痛ましくも頼もしかった。彼らはまさにオスマン帝国崩壊過程のなかで確立された国民国家システムに適応することができなかった、または適応されることがなかった犠牲者といえる。トルコ共和国と日本は国民国家システムを比較的スムーズに受け入れることが出来た国家であると言われている。しかしトルコ共和国に切り捨てられ、忘れられたアフスカ・トルコ人を見ると、日本にも国民国家形成のために切り捨てられ、忘れ去られた人々が居たのではないかと疑問がわいてくる。我々の国民国家とは彼らの犠牲の上に成り立っているのかもしれない。この短いフィールドノートがそのような存在へ想いを馳せる一助となることが出来るなら幸いである。

- 1) Türk dil kurumu, 1998, P.47.
- 2) Rasim Bayraktar, 2000, P.15.

- 3) [http://www.fikiryazilari.net.dunya\\_siyaset/dunya1.html](http://www.fikiryazilari.net.dunya_siyaset/dunya1.html)
- 4) [http://www.fikiryazilari.net.dunya\\_siyaset/dunya1.html](http://www.fikiryazilari.net.dunya_siyaset/dunya1.html)  
Rasim Bayraktar, 2000, P.60.
- 5) [http://www.fikiryazilari.net.dunya\\_siyaset/dunya1.html](http://www.fikiryazilari.net.dunya_siyaset/dunya1.html)
- 6) [http://www.fikiryazilari.net.dunya\\_siyaset/dunya1.html](http://www.fikiryazilari.net.dunya_siyaset/dunya1.html)
- 7) <http://www.geocites.com/ahiskal944/turkilleri.html>
- 8) [http://www.fikiryazilari.net.dunya\\_siyaset/dunya1.html](http://www.fikiryazilari.net.dunya_siyaset/dunya1.html)
- 9) ここで主に参考にした著書 *Ahıska -Çıldır Beylerbeyliği* の作者 Rasim Bayraktar は、アゼルバイジャン生まれのアフスカ・トルコ人であり、現在はイズミルに在住し、私のクラスメートにも大きな影響を与えている人物である。

#### 参照文献

- Türk dil kurumu, *Türkçe sözlük1*, 1998.
- Rasim Bayraktar, *Ahıska -Çıldır Beylerbeyliği*, 2000.
- 参照ホームページ  
[http://www.fikiryazilari.net.dunya\\_siyaset/dunya1.html](http://www.fikiryazilari.net.dunya_siyaset/dunya1.html)  
<http://www.geocites.com/ahiskal944/turkilleri.html>